

22 世紀八幡ルネッサンス運動 (略称: 八幡ルネ) 企画作業チームニュース

ひ る ば

■発 行: 22 世紀八幡ルネッサンス運動
企画作業チーム ひろば編集部

■事 務 所: 八幡市八幡高畑 10-76
TEL/FAX075-981-6505
090-3710-4842

■橋本連絡所: 八幡市橋本興正 7-4 075-971-9488

■男山連絡所: 八幡市男山指月1-12 080-3780-6140

■八幡連絡所: 八幡市八幡土井135 竹島文化2F13号

■振 込 口 座: 京都中央信用金庫八幡支店
普通 5243582
22 世紀八幡ルネッサンス運動

目的

八幡市民の幸福の増進のために活動する。古い歴史を有する八幡の秀でた伝統を継承し、八幡市民の総意と英知を結集して活動する。町の隅々にわたり高い関心を払い、たくましい意志と情熱を貫いた粘り強い行動で、光とうるおいある生活と文化を享受するように努める。

今年も開催します！

第二回 遊びながら環境を考える

三世代交流イベント

〜どうする気候変動！〜

実行委員会

昨年の3月21日に八幡市役所東側広場において「遊びながらエコを考える三世代交流イベント」が開催されました。当日は、子ども、親や祖父母の世代をふくめ300人以上が集まり、環境を考える集いとして成功しました。

地球温暖化によって「気候危機」が進行しています。昨年は、ハワイ島の森林火災、ヨーロッパやアフリカの旱魃で農業に深刻な影響が出たほか、「気候難民」と称する言葉も生まれました。日本国内でも秋田の集中豪雨など、これまで経験したことのない災害もたらされました。そんな中、国連のグテーレス事務総長は、「まだ私たちは最悪の破局を回避することができるとして地球温暖化対策の加速を促しています」。

今回は、京都府地球温暖化防止活動センターをはじめ、城南衛生管理組合、河川レンジャー、八幡市環境政策課、京都八幡高校南キャンパスボランティア部、八幡市立図書館などの協力を得ることもできました。

イベントを成功させるために実行委員会は、これまでに7回開かれ準備を進めています。今年は雨天でも開催できるように文化センター4階の小ホールを会場に開催します。

メインの広場では、「五感を使った遊びのなかで環境を考える」として「空気の重さと熱気球づくり」「手作りコ

マ回し」「熱帯雨林とフタバガキ」などが準備され、5つのブースでは、「やわたエコかるた体験」「地球温暖化と気候変動(CO2削減)、リサイクルの工作体験」「八幡の自然と生態系の紹介」などのブースも充実しています。ほかに、オープニング行事として、午前10時から、八幡高校吹奏楽部の演奏、午後1時からドルチェハンドベルリングの演奏が予定されています。

期日は、3月31日(日)の午前10時〜午後3時。

多数のご参加をお待ちしています！

環境を考える本

『ゾウの森とポテトチップス』

一読者より

子ども向け絵本ですが、大人にとっても読みごたえのある本です。

帯に、次のように紹介されています。「ここは、日本の東京から南へ、およそ4000キロのところにある世界で3番目に大きな島・ボルネオ島。ボルネオ島は、熱帯雨林にさまざまな生きものたちがくらす大自然の宝庫。そんな熱帯の島と、わたしたちがふだんにげなく食べているポテトチップスには、実はとても深いつながりがあるのです。」

昨今の気候変動には、CO2の排出の問題から、火力発電や自動車の排気ガスなどに焦点が当てられがちですが、私たちが日常口にしてる食品が東南アジアの森林破壊につながっているということが案外見過ごされています。

この本によれば、ゾウやテナグザル、オランウータンなどたくさん動物がくらすボルネオ島の森林がアブラヤシを栽培するプランテーションの開発によりどんどん縮小され、それらの動物が住みにくくなっているのです。

アブラヤシからしぼりとられたパーム油は、世界中に輸出され、ポテトチップスやカップめん、マーガリンなどの食品だけでなく、洗剤やシャンプー、インキ、化粧品など、かぞえあげたらきりがないほどのものに利用されています。そして、そのせいで、動物たちの生活の場が失われているのです。

人類の生存が危ぶまれるほどの気候危機が迫っている中、森林破壊につながる加工食品などの問題にも関心をもっていくべきだと考えさせられました。



写真と文||横塚真己人(よこつかまこと)。(株)ぞうえん社。

地球が先か、世界が先か？

一人類より

地球の温暖化による気候変動によつ

て、人類はもとより動物も植物も、すべての生命体が危機にさらされることになる。すでにその兆候は、年を追うごとに顕著になりつつある。「このままではいけない」と考えるのは、人類の発想だ。国家で構成される世界の発想はどうだろうか。「そうだけど、国益が優先だ」、「そうだけど、自分と身内が大事だ」と考えている。だから、ミサイルや戦闘機でCO2をどんどん排出し、街や森林を焼いてCO2の量を加速させる。国連はそんな国家を集めて、この地球をなんとかしようと世界に訴えている。地球が減ることより、国家が減ることを怖れている世界。地球が減れば、領土も経済も資源も貯金も、全てが宇宙の屑になってしまうの。「いやいや、人類は滅んでも日本人は生き残るで」。この矛盾に早く気付くために、どちらの発想が先だろうか？

訂正とお詫び

前回に同封しました第32回八幡市民文化サロンのチラシで、開催曜日に誤りがありました。

【誤】 3月2日(金)

【正】 3月2日(土)

お詫びして訂正いたします。



注目される「気候市民議会」

フランスの「黄色いベスト運動」について

伊藤錚治

『市民議会が一躍有名になったのは、イギリスの環境運動「絶滅への叛逆」とフランスの「黄色いベスト運動」の成果である。』と書いているのは、『人新世の「資本論」』の著者である斎藤幸平である。その本の第五章「加速主義という現実逃避」の中で、彼は述べる。

『これらの運動は、その背景は異なるものの、どちらも道路や橋を封鎖し、交通機関を止めるなどして、日常生活に大混乱をもたらしたのだ。逮捕されることを厭わない「過激」な運動は、世間の大きな注目を集めたが、その顛末は日本ではほとんど知られていない。』

私はこのことをよく知ってもらうために、斎藤の言葉を引用する羽目になる。

『その結果、「黄色いベスト運動」は、気候変動対策として化石燃料税を導入しようとした「意識の高いエリート」マクロンに対して、トラック運転手や農民といった低所得者が反発した図式で、しばしば理解されている。そのため、市民議会の話はほとんど報じられていない。』マクロンとはフランス大統領だが、斎藤は市民議会の内容こそ大事だと言っているわけだ。

彼は『実は「黄色いベスト運動」には、より大胆な気候変動対策を要求する人々も参加していた。マクロンが批判されたのは、化石燃料税を

引き上げながらも、二酸化炭素排出の多い富裕層に対する富裕税を削減しようとしたからであり、さらには地方の交通機関を削減し、自家用車必要の生活を人々に強いてきたからである。』

2050年までに、二酸化炭素の排出量をゼロにする取り組みは今危機を迎えている。世界の科学者でつくる気候変動に関する政府間パネル(IPCC)は、各国の現在の削減目標では今世紀末までに地球の平均気温は2.1〜2.8度上昇すると予想し、「この10年の対策が数千年先に影響する。」と警告した。アラブ首長国連邦(UAE)で開かれた国連気候変動枠組み条約第28回締約国会議(COP28)では、議長国UAEは再生可能エネルギーの容量を2030年までに3倍にする有志国誓約をまとめ、116カ国が加わったと発表した。各国の連携は強まってはいるものの、気候危機を取り巻く情勢はきわめてきびしい。各国富裕層の排出阻止の責任は、これまでよりも格段にウエイトが大きくなっている。

斎藤は記す。『強い批判に晒されて、マクロンは2019年1月に「国民大論争」を実施することを発表した。その結果、全国の自治体で1万ほどの集会が開かれ、1万6000もの案が提出されたという。だが、それでも形だけの「論争」だと感じられた国民の不満は根強く、批判され促される形で同年4月に、マクロンは以前から約束していた「気候市民議会」の開催を発表したのだ。』

い。粘り強く、大胆に前に打って出ることを考え、行動を起こすべきだ。日本各地でさまざまな気候変動の取り組みが行われているが、世論として十分に伝わっていない心配が生まれている。情報が全国で瞬時に共有できるシステムが重要になっ

ている。

斎藤は言葉を引き継ぐ。『こうして、フランスは150人規模の市民議会が開催される運びとなった。そして、2030年までの温室効果ガス40%削減(1990年比)に向けて対策案の作成が、市民議会に任せられたのである。』

そして『市民議会の特徴は、なんといっても、その選出方法である。選挙ではなく、くじ引きでメンバーが選ばれるのだ。ここに選挙で選ばれる国会との決定的な違いがある。もちろんくじ引きといっても完全にランダムではなく、年齢、性別、学歴、居住地などが、実際の国民の構成に近くなるように構成される。』

なかなか興味深い。

『そして、市民議会においては、専門家がレクチャーを行い、そのうえで参加者は議論を行い、最終的には投票で全体の意思を決定する。』

注目すべきは、『2020年6月21日、ボルヌ環境相に提出されたフランスの市民議会の結果である。抽選で選ばれた150人は気候変動防止対策としておよそ150の案を提出した。』

『そのなかには、2025年からの飛行場の新設禁止、国内線の廃止、自動車の広告禁止、気候変動対策用の富裕層税の導入が含まれているの

だ。さらに、憲法に気候変動対策を明記することや「エコサイド(環境破壊)罪」の施行について、国民投票の実施を求めたのである。』

「気候毛沢東主義」とは、カリスマの指導者が気候変動対策にあたるトップダウン型で、自由市場や民主主義の理念を捨てることだが、これには斎藤は厳しい認識を示している。

また、『市民議会の内容がこまごまでラディカルな内容になったのは、民主主義のあり方が抜本的に変容したという事実からけっして切り離せない。さらに、この変化をもたらしたのが、社会運動だったという点も強調しておこう。』

斎藤はまだ37歳の若さだが、その理論を理解しようとする私は79才で、この理論を頭に叩き込むために、は相当の努力を要する。彼の考えは、考えればかなり当たり前のことだが、彼の考えは卓越した分析を行って妙に私たちを驚かす。

続けて斎藤の展開を追っていく。

『黄色いベスト運動』や「絶滅への叛逆」はしばしば具体的な要求を掲げていないと批判されてきた。だが、彼らの求めていたより民主的な政治への市民参加は、市民議会という形で実現され、ついに具体的な政策になったのである。』

そして斎藤は、次のようにまとめる。

『これらの運動が単に具体的要求を掲げていたら、ある程度は政策に反映されたかもしれないが、議会制民主主義そのものを刷新するところまではいかなかっただろう。それゆえに、革新的な提案も採用されなかったはずだ。社会運動が「気候毛沢東主義」に陥ることなしに、民主主義を刷新し、国家の力を利用できることを、この市民議会は証明したのである。』

このまとめは、私としては同意できるが、批判的に見る人も少なくないだろう。

『これらの運動が単に具体的要求を掲げていたら、ある程度は政策に反映されたかもしれないが、議会制民主主義そのものを刷新するところまではいかなかっただろう』の下りや「国家の力を利用できる」などは、相当の紙面を要するところで、一筋縄ではいかない。ここでは斎藤の考えに感性として賛成できることにとどめる。

私が斎藤に引けを取らないところがあるとすれば、経験である。斎藤は気候変動の解決策として、脱成長「ミニズム」を提唱し、富や生産関係の共有化「モン」を明らかにしている。すなわち、新しい経済体制である。私はこれまでの経験から、現実として、また感覚として、斎藤の提案は十分に可能だと判断している。

その手がかりを、22世紀八幡ルネッサンス運動から学んだ。気候変動に直面し、世界がその解決に悩む中で、斎藤提案実現後の、夢と現実を語ることであれば、これに勝る幸運はない。

しかし、現実「地球沸騰」に翻弄されている。

私が未来を語るには、あまりにも準備が不足している。